

理学部は今

No.37 June 2014



新入生合宿研修（数学科）



野崎先生と和田先生を囲む会（生物学科）



櫛形山における野外観察会（自然環境科学科1年生）



CONTENTS

■学部長挨拶

山田 裕（理学部長）…………… 2

■新任教員紹介

・江尻信司 准教授（物理学科）………… 3

・武智麻耶 助教（物理学科）………… 3

・酒井達也 教授（生物学科）………… 4

・植田勇人 准教授（地質科学科）… 4

・椎野勇太 助教（地質科学科）…… 5

■理学部コロキウムの開催予定………… 5

■これからの行事予定…………… 5

■各学科ニュース…………… 6

■理学部後援会の事業報告と事業計画 … 8

■平成25年度卒業生進路状況および
平成26年度入学者数…………… 8

理学部のホームページ <http://www.sc.niigata-u.ac.jp>

発行／新潟大学理学部広報委員会・理学部後援会



理想を目指して

—理学部長就任にあたって—

工藤前理学部長の自然科学研究科長就任に伴い、その後を受けまして理学部長に就任いたしました。未熟ではありますが、皆様のご協力を得まして理学部長として2年間全力で務めさせていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

理学は本来自然科学に対する純粋な知的興味の探求心から始まっている分野です。そして常に理想を追い求める学問でもあります。理想を求める心は人間の根幹をなす重要な本能の一つでもあります。一方で様々な外的要因により簡単に失われてしまう非常にもろい側面も持っています。しかし理学の研究を目指すとき、失ってはならない大切な想いだと思っています。

一般に理想を追い求めることは時に非常に困難で、多くの場合現実の前に挫折を余儀なくされることがあります。また時に「大人になる」といった表現で妥協を強いられることもあります。ただ一般的には、現実を受け入れる心は必要な場合が多く、さらにそれに対応できる柔軟性は社会人として必要不可欠な要素の一つです。我々理学を目指している研究者にやや一般人と異なり子供っぽいところがあるのは、良くも悪くもそれでも無邪気に「理想」を追い求めてしまう心が残っているからかもしれません。しかし現在理学部を取り巻く状況は無邪気に「理想」を追いかけていられない、厳しい現実にとさらされています。

現在国立大学は大学改革加速期間として28年度より始まる第三期中期目標に向け様々な課題を提示されています。学長のリーダーシップ、ガバナンス改革、グローバル化、イノベーション機能強化、人事・給与システムの弾力化等です。そしてその達成度に応じて仕分けが行われ、運営交付金の再配分、およ

理学部長 山田 裕



び大学の格付けが行われます。これはとりもなお

さず大学に、選択と集中そして効率化が求められていることを意味します。

このような状況の中、新潟大学理学部も今後目指す方向性を問われてきています。昨年度ミッションの再定義が工藤前理学部長の下でまとめられ、強みや特徴、社会的役割などを明らかにしてきました。これをもとに新たな一歩を踏み出していく必要に迫られています。さらなる現実としましては、少子化に伴います18歳人口の減少、理工系離れなどもあり新潟大学理学部の存在意義そのものも問われています。

このような状況下で理学部を如何に発展させるかを考えますと、現実を受け入れ、文科省の方針に沿って選択と集中、さらに効率化を行うことが重要かもしれません。しかし立ち止まって、我々の最も重要な仕事はどのようなものかを考えますと、それはやはり新潟大学理学部を目指してきた学生たちに如何にして自然科学への好奇心を植え付け、それを継続、発展させていく力を育成していくかであると考えます。そのために当然重要になるのは、基礎的な専門知識と深い教養の教育を行う充実したカリキュラムと好奇心を満足させる最先端の研究環境であると考えられます。そしてこれを理想的に可能にするためには、「自由な時間」と十分な研究費なのですが、現実と如何に折り合いをつけるか、今後教職員皆で、さらなる知恵と努力が必要になるかもしれません。ただ最後まで理学部らしく理想を目指し続けていきたいと考えています。

後援会の皆様には、理学部の今をご理解いただき、これまで以上のご支援をお願いいたします。

新任教員あいさつ



物理学科 准教授
江尻 信司

新潟大学のテニユアトラックプログラムで採用され、2010年1月に新潟に来ました。4年間、テニユアトラック教員としていろいろな勉強をさせていただいて、この春からは、晴れて、理学部物理学科に配属となりました。まだまだ至らないところがあり、ご迷惑をかけることもあると思いますが、今後とも、よろしくお願いします。

専門は、素粒子論における基本的な相互作用の一つ「強い相互作用」の理論、量子色力学(QCD)です。通常、強い相互作用は原子核の内部だけで働く力ですが、宇宙誕生直後の超高温状態や特殊な天体の内部の超高密度状態など、極限的な状況下ではQCDからの第一原理計算が重要になります。私はその「極限系の物理」を、スーパーコンピューターを用いた数値シミュレーションで、理論的に研究しています。

新潟に来る前は、筑波、イギリスのスウォンジー、ドイツのビーレフェルト、東京、アメリカのブルックヘブンと、2・3年ごとに国境を越えて転々として、実は、新潟に来て

からの4年という在住期間は、私にとって、学生時代を過ごした金沢の10年に次ぐ長さです。

私のふるさととは、愛知県の山間部、尾張、三河、美濃の国境近くの町。お寺の記録によると、桶狭間の戦い由来の落武者集落の落武者一族の出身だそうです。影武者とよく間違えられますが、落武者ではなくて影武者。ではなくて落武者です。と、書いていたら、昨年話題になったNHKの連続テレビ小説「あまちゃん」を思い出しますが、昨年は「あまちゃん」にはまりまして、「海女カフェ」ならぬ「サイエンスカフェ」というものを燕市の人たちと始めてしまいました。アイドルは来ませんが、講師を招いて、2・3カ月に一回のペースで開催します。科学をネタにしゃべりするのですが、よかったら来てください。コーヒーとお菓子付きで参加費300円です。開催情報は私のホームページで確認してください。新潟日報でも紹介されましたよ。



物理学科 助教
武智 麻耶

物理学科に赴任しました武智麻耶です。生まれは四国で大学時代は大阪で過ごしました。その後、埼玉の理化学研究所、ドイツ GSI 重イオン研究所を経て、現在新潟にやってきました。前任地のドイツは、見渡す限りの平野や森、マイン川等が美しい土地でしたが、新潟に赴任した晴天の日に研究室から見た、遠くにそびえ立つ山々や、広がる日本海の美しさはドイツとはまた対照的で非常に感動しました。美しい自然から鋭気もらって、仕事に励んでいきたいと思います。

さて、私の専門は原子核物理の実験研究になります。メインの研究内容は原子の中の、陽子と中性子でできている、原子核の大きさを測るというものです。天然に安定に存在する原子核では陽子と中性子が混ざり合い、非常に密につまった核を構成するため、原子核の大きさは構成核子数の $1/3$ 乗に比例するのですが、中性子過剰核、陽子過剰核といった、少なくとも地球上の我々の生活環境では安定に存在できない原子核では陽子と中性子

の分布に偏りが出たり、必ずしも密に詰まった構造を保てなくなったりして、その結果、原子核の大きさに異常性がみられるという現象が起こります。こういった現象を観測するため、理化学研究所やドイツ GSI 重イオン研究所の重イオン加速器施設で、天然に存在できない不安定な原子核を人工的に作り、核反応実験を行うことで原子核のサイズをプローブするという研究を行っております。

これまで上記のような研究を加速器施設の一研究者としてさせてきて頂いたのですが、今回、新潟大学に赴任しまして、研究者というだけでなく教育者の立場にも立つことになりました。教育者、という少し厳めしい感じがしますが、とにかく学生さんに物理の知識や研究における考え方・技術をしっかり伝えることはもちろん、なによりも一緒に楽しく実験をして、研究の面白さを伝えていけたらと思います。研究・教育を通して、新潟大学に貢献できるよう頑張っていく所存ですので、どうぞよろしくお願いいたします。



生物学科 教授
酒井 達也

本年4月に理学部生物学科に着任した酒井達也です。新潟大学ではこれまで4年2ヶ月の間若手研究者育成室に所属し、テニユアトラック教員として主に研究活動を行ってきました。昨年度無事テニユア付与審査を通過し理学部教員として正式採用されました。これからは研究活動ばかりでなく、教育や大学運営の一端を担うこととなりますので、皆様何卒よろしく御願いたします。

私は生まれも育ちも東京でしたが、博士号を取得してからはオーストラリアキャンベラで半年、京都で4年、横浜で8年と転々と住む場所を変え、4年前に新潟にやってきました。新潟の冬は若干厳しく感じるときもありますが、春から秋にかけては大変気持ちよく、また食べ物がどれも美味しくてすばらしいです。私の居室からは日本海と夕日、反対側には飯豊山脈が見えて、東京・横浜では味わえなかった贅沢を感じながら仕事をしています。新潟に来てから二人の子供を持ちまし

たが、子育てする環境としても申し分ないです。

私の専門分野は植物の環境に適応した成長パターンの制御機構の研究です。植物は人の食と環境を守るのになくしてはならない生物です。このような植物のもつ能力の理解と新しい遺伝子機能の発見をすべく、主に突然変異体を用いた分子遺伝学的解析手法によって研究を行っています。これまで光の方向を認識するフォトリポピン光受容体の同定や光シグナル伝達経路の新たな機能発見など行ってきましたが、現在は光による植物ホルモンオーキシンの不均等分布調節機構やオーキシン不均等分布に依存しない光屈性誘導機構の解明に挑戦しています。研究者を引退するころには植物の光屈性の分子メカニズム全体像が解明されているかなと考えています。今後も世界の研究者仲間達と肩を並べて新しい研究成果を発表していけたらと思っています。



地質科学科 准教授
植田 勇人

本年度より地質科学科に着任した、植田勇人です。私の専門は地質学のうち、大地の変動のしくみや歴史を探るテクトニクスという分野です。取り組んでいるテーマの一つとして、プレートが沈み込む境界付近の地下（海底下数～数十km）でどのような岩石の動きや流れがおこるのかに興味があります。現在の地下での大地の動きを観測することは大変困難ですが、かつて地下深部にあった地層や岩石が現在の山地や海底などに露出している場所があります。これらを詳しく調べることで、過去の地下深部の動きを復元することを試んでいます。これまでの検討で、沈み込むプレートの直上の地殻やマントルが「ぐるぐる」と回るように攪拌された様子が見えてきました。そもそも日本列島の大地は、イザナギ・イザナミの2神が棒で海底をかきまぜたことによって形成されたとされていますが、この古い説は意外と核心を突いているのかもしれない。

また、今後取り組みたいテーマとして、過去の太平洋の海底を構成していたプレートの配置や形状などの古地理を復元したいと思います。大陸の配置の復元は従来から多くの研究がなされています。しかし、できてい

れ地球内部に沈み込んで消えていく海洋底の過去の様子を復元するのは難しいのです。この問題に対して、地層の中に残された過去の（もう消えてしまった）海洋プレートの断片を拾い集めて、太平洋の海底の歴史を復元すべく研究を開始したところです。

分野柄、研究活動では野外調査で山野によく出かけます。指導する学生・院生達にも、現地で自然を実感しながらその謎に取り組む喜びを知ってもらいたいと思っています。また、陸上での地質調査のほか、2年に1度くらいのペースで潜水艇などによる海底の地質調査にも出かけています。

私の出身は静岡県です。10年に1度しか雪が積もらない土地で生まれ育つ中で雪国の自然に憧れるようになり、ほとんどそれが動機で北国の大学に進学し、以来ずっと雪国暮らしが続いています。新潟に暮らすのは3度目ですが、海山川と遊ぶ所も多く、とくに春～初夏の山は豪雪地ならではの水々しく潤った森と美味しい山菜が気に入っています。学生達ともそうですが、休日には我が家の乳幼児共を連れ出して、県内や周辺の自然や風土などを楽しみながら暮らそうと思っています。



地質科学科 助教
椎野 勇太

今年度から自然科学系（地質科学科）に着任した椎野勇太です。前職の東京大学総合研究博物館では、研究だけでなく展示業務にも従事していました。酒どころ新潟での生活は初めてですが、「酒の井戸」伝説を残す千葉県酒々井町（しすいまち）で育った私は、何か強い縁を感じています。別段アルコールに強くありませんが、いろいろと頑張りますのでよろしくお願いします。

専門分野は古生物を題材とした進化形態学です。古生物といっても恐竜やアンモナイトなどの有名な化石ではなく、二枚の殻を持った海棲の無脊椎動物「腕足動物」という超マイノリティを扱っています。現在の海では馴染みのない生物ですが、約5.4～2.5億年前の古生代と呼ばれる時代には、きわめて多様な殻形態を持つ腕足動物が、劇的に繁栄や絶滅を繰り返していました。彼らの進化多様性に秘められた謎は、奇妙な殻形態の備えた特性から解明できそうです。環境や生物活動といった「かたち」を取り巻く諸現象を包括的に捉え、長い時間軸上で起こる形態大進化のメカニズムを理解することが究極的な目標です。

偉そうに述べてしまいましたが、かつては迷走していました。事の発端は、同じ中部地

方にある静岡大学で過ごした学部および修士時代に遡ります。当時は調査や作業を人一倍こなし、大量のデータを蓄積しつつも、それらを有機的に関連付けて考察することができませんでした。仕方なく断片化した結果を積み重ね、まるで努力賞かのような貧弱な論文で何とか修士課程を終えようとしていました。もちろん自覚していましたが、どうしようもありません。ところが、修士課程2年の夏休みに事態が急変します。数あるデータに埋もれていた化石生物のある1種に、おもしろい形態的傾向を見出してしまったのです。そこから、他のすべてのデータを捨て、現在のテーマへと至る研究への道を歩み始めました。新しい分野へ挑戦した結果、昔の自分がなぜ悪かったのかも見えてきました。その後、捨て去ったはずのデータも回収し、体系的な考察を付与して無事学術誌への掲載までこぎ着けました。結果を得るための効率化は確かに重要ですが、多くの無駄を礎として新しいアイデアが創出されることもあるのです。

生物の化石が紡ぐ進化や絶滅のストーリーは、バランスよく生きることの大切さを教えてくれます。地質科学ならではの広大な時空的視野を備え、多様性の中で解決策を模索できる人材育成にも努めてゆきたいです。



理学部コロキウムの開催予定

第67回 2014年5月21日（水） 数学科
第68回 2014年6月25日（水） 物理学科
第69回 2014年7月23日（水） 生物学科

第70回 2014年10月22日（水） 化学科
第71回 2014年11月26日（水） 地質科学科
第72回 2015年 1月28日（水） 自然環境科学科

これからの 行事予定

8月10日（日）、11日（月）

新潟大学オープンキャンパス

9月22日（月） 秋期卒業式

8月11日（月）～9月30日（火） 夏期休業

10月1日（水） 第2学期授業開始

9月2日（火）

3年次編入試験

オープンキャンパスのイベント等の詳細は新潟大学および理学部のホームページに掲載されます。



各学科ニュース

数学科

平成26年3月に竹内照雄教授が定年退職されました。竹内先生は昭和48年に新潟大学教養部に着任し、平成6年に理学部に配置換えになられてから、合わせて41年余りの長きにわたって新潟大学の教育研究に携わり多大な貢献をなさいました。長年にわたり数学科を支えて下さいまして、大変ありがとうございました。4月に山田修司准教授が教授に昇格し、数学科の情報教育はさらに充実度を増すものと思われまます。

4月に入り、昨年は中止した新入生合宿研修を4月12日の午前中はメイワサンピアで、12日午後と13日午前に関東青少年研修センターで行いました。この研修旅行は新入生同士や教員との交流と親睦を目的としています。今回は学生40名、教員4名が参加し、桜の花もちょうど満開となり好天に恵まれて楽しい2日間を過ごしました。初日の8時30分に大学に集合しバスでラムサール条約に登録されている佐潟を訪れ、メイワサンピアでは各自の自己紹介から始めました。研修センターに移動してからは、初日にバスケット、バドミントン、バレーボール、卓球などを楽しみました。その後、講義履修上の注意、大学生活のアドバイスなどを教員側から伝え、2日目には、桜の木の下で集合写真を撮り、星先生と小島先生より数学の学習・研究に

対する考え方や体験談などをお話ししてもらいました。終了後のアンケートによると例年より講義に対する評価が高くなり主催できて良かったと感じました。

5月には、理学部コロキウムで学科持ち回りで田中教授が講演します。この企画は最近では教員・学生の他、一般の方々も参加できるようになっています。また、キャリアアップを図るため例年5月に行っていた数学科講演会は7月に開催の予定です。



新入生合宿研修

物理学科

物理学科では、平成25年度末にて谷本盛光教授が定年によりご退官されました。谷本先生は、素粒子物理学の理論を専門とし、昨年度の新潟日報賞を受賞するなど、多数の研究成果を挙げ評価されております。教育にも尽力し、数多くの院生・学生を育ててこられました。また、理学部長、自然科学系長を歴任し、大学運営にも多大な貢献をされました。写真は谷本先生の最終講義の様です。長年お疲れ様でした。

4月から、谷本先生と入れ替わりで素粒子論グループに江尻信司准教授が、原子核実験グループに武智麻耶助教が、新たに着任されました。お二方の今後のご活躍を期待しております。今号の新任教職員あいさつにご寄稿なされていますので、ご覧ください。

本年度は、新1年生50名と3年次編入生2名が入学しました。入学式後のガイダンスを終え、大きな問題も無く、無事に大学生活をスタートしたようです。高校と比べて、講義内容はさらに難しくなります。一方、生活マネジメント次第で自由時間が多く手にすることが出来ます。大学へ入学した目的をよく考えて勉強し、そして今しかない大学生活をエンジョイしてくれることを切に願っています。



谷本先生の最終講義

化学科

昨年度末、本年度始めの化学科ニュースをお伝えします。3月上旬には分野毎に卒業研究発表会が開催され、4年生が一年間の研究成果を発表しました。

また、3月18日にグリーンケミストリー研究シンポジウムが開催されました。本学科の教員3名の他、金ナノ粒子触媒の研究で有名な首都大学の春田正毅教授に講演をお願いしました(写真)。また、大学院生および学部4年生によるポスター発表も行われ、多くの教員、学生との間で意見交換が行われました。

新年度4月7日には入学式が行われ、化学科では39名の新生を迎えました。1週目には各種ガイダンスが行われ、2週目の4月15日、大学食堂にて新入生懇談会が行われました(写真)。新入生と化学科教員が軽食をとりながら懇談し、自己紹介などを行いました。

4月19日には毎年恒例の化学科縦コンが行われ、1～4年生と大学院生、教員との間の親睦を深めました。

慌ただしい年度始めの行事も一段落し、通常の大学生活が始まっています。



グリーンケミストリー研究シンポジウム



新入生懇談会

生物学科

昨年の3月をもちまして、我々生物学科の和田清俊先生が、そして生物学科と協力関係にある理学部附属臨海実験所の野崎眞澄先生が定年退職されました。2月21日には両先生の最終講義、そして両先生を囲む会が開催されました(表紙写真)。和田先生は、アサガオやシソを材料に、「花の咲くしくみ」を生理学的、生化学的、分子生物学的な見地から研究を進めてこられ、貧栄養、低温、弱光などのストレスが花を咲かせていることを明らかにしてきました。野崎先生は、ヌタウナギやヤツメウナギなどの無顎類(脊椎動物の進化の最初期に出現したアゴを持たない原始的な魚類)を材料に、脳下垂体ホルモンの同定、およびその分子進化のあらましなどを明らかにしてきました。両先生は教育活動にも熱心に取り組まれ、多くの学生に慕われていました。生物学科一同、深く御礼申し上げたいと思います。両先生の今後のご健勝とご活躍をお祈り致します。

本年度生物学科へは、21名の新1年生と1名の3年次編入生が入学しました。また、酒井達也先生が着任されました(新任教員あいさつをご覧ください)。4月8、9日には新入生ガイダンスが行われ、そして4月25日の夕方には、毎年恒例の新入生と教員の懇談会が開催されました。新入生、在学生および教員が理学部大会議室に集まり、お弁当を堪能しながら、新入生の自己紹介や教員の「なぜ研究職、あるいは大学教員の職に就こうと思ったか」というお題のスピーチで盛り上がりしました(写真)。5月17、18日には、佐渡臨海実験所において新入生研修会が行われる予定です。また、7月18日には生物学科夏の懇親会が企画されています。学部学生から大学院生および教員が一同に会する生物学科恒例の行事です。次回はこれらの模様についてご報告致したいと思います。



新入生と教員の懇談会

自然環境科学科

自然環境科学科では、この春27名の卒業生を送り出し、1年生32名、3年次編入生2名を学科の新メンバーとして迎え、新年度をスタートさせました。3年次編入での入学者は2年ぶりです。4月11日には恒例の新入生歓迎会も開催され、高橋学科長の「大学生活を楽しむためには、しっかりと勉強をすることが必要。」というありがたいお言葉を皮切りに、先輩や教員の熱烈な歓迎を受けました(写真)。表紙の写真は、自然環境科学概論Bの一環として4月26日に1年生を対象として行われた、新発田市櫛形山における生物の野外観察会の様子です。自然環境科学概論は、物理・化学・生物・地学、各分野の基礎を学ぶための入門科目です。自然環境科学科は、理科4分野全てを身につけてもらうためのカリキュラムを用意しているため、いろいろな分野に興味をもつ学生が混在する、ちょっと変わった学科になっています。新入生の皆さんには、自分が興味をもつ学問分野だけに閉じこもることなく、学科の仲間と互いに刺激しあって、広い知識を身につけ、有意義な4年間を過ごしてもらえたらと思います。



新入生歓迎会の様子

地質科学科

地質科学科では、4月に新たに26名の新入生を迎えました。1年生は入学後3回目になる週末に早速、県内での1泊の野外実習に元気に出かけました。実習の最初のうちは、わかりやすい岩石を対象に、簡単な課題をこなしていきます。地質学は経験で養われる「目」をととても大切にしますので、これからの実習で経験を重ねて、「岩石がわかる楽しさ」を徐々に味わっていただきたいと思います。

多くの4年生は、初春の時期から就職活動に取り組んできました。当学科で学生さんが身につける専門性は、他校では得がたいレベルのもので、社会で高く評価されています。学生皆さんのご努力が多く実を結び、今シーズンの就職実績はたいへん堅調に進んでいます。皆が希望の道に進めるよう、教職員一同、これからもできる限りの応援をして参ります。

3年生は、3月の末にいわゆる「大巡検」と称する、長めの日程で遠方をめざす野外実習に出かけました。今回の目的地は北陸・紀伊・近畿方面です。1台の貸切バスに遠路揺られ、新潟県では見られない珍しい岩石や鉱物、あるいは各地の博物館などを見学し、専門の知見を深めるとともに、準備や行程を通

じて学生同士の結束も強まったと期待します。

さて地質科学科では、ここ数年来、多くの定年退職者を送り、その後任として若手研究者を向かえ、学科の専任教員数がこの4月で約10年ぶりに12名となりました。昨年12月に着任した准教授・高橋俊郎(岩石学)に続き、4月には准教授・植田勇人(付加体地質学)と助教・椎野勇太(古生物学)が加わり、これから益々教育面での充実を期しています。保護者の皆様より一層のご理解ご支援をいただけますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



1年生野外実習



理学部後援会の事業報告と事業計画

理学部後援会理事会が3月28日（金）に開催され、平成25年度の各種事業の報告と、平成26年度の各種事業計画がいずれも承認されました。そして平成26年度の定期総会が4月7日（月）に開催され、今年度の各種事業計画の説明がなされ、承認されました。

平成25年度 理学部後援会事業報告

1 定期総会の開催

平成25年4月5日（金）11時から
新潟大学理学部B303講義室

2 各種事業

（1）学生の課外活動及び福利厚生関係

- ① 新聞の購読（新潟日報、朝日新聞、日本経済新聞）
- ② 大学祭援助
- ③ 学生用設備充実の援助

（2）学部教育事業関係

- ① 特別講演会の開催、学生用図書購入、新入生合宿研修、野外実習及び臨海実習等の援助
- ② 学生インターンシップ協力事業所との懇談会への援助
- ③ 国際交流事業関係等への援助

（3）卒業祝賀会関係

平成26年3月24日（月）東映ホテルで開催

（4）その他

広報活動として「理学部は今」を年3回発行

3 理事会の開催

平成26年3月28日（金）17時30分から理学部小会議室

平成26年度 理学部後援会事業計画

1 定期総会の開催

平成26年4月7日（月）11時から
新潟大学理学部B303講義室

2 各種事業

（1）学生の課外活動及び福利厚生関係

- ① 新聞の購読（新潟日報、朝日新聞、日本経済新聞）
- ② 大学祭援助
- ③ 学生用設備充実の援助

（2）学部教育事業関係

- ① 特別講演会開催への援助
- ② 学生研修、実験・実習への援助
- ③ 国際交流事業関係等への援助
- ④ インターンシップ関係等への援助

（3）卒業祝賀会関係

卒業式当日に卒業祝賀会を開催 平成27年3月23日（月）
（参加者：卒業生、保護者、同窓会役員、後援会役員、教職員）

（4）その他

広報活動として「理学部は今」を年3回発行

3 理事会の開催

平成27年3月30日（月）17時30分から理学部小会議室（予定）



平成25年度卒業生進路状況および平成26年度入学者数

		数学科	物理学科	化学科	生物学科	地質科学科	自然環境科学科	計
平成26年度 入学者数	新入学	40	50	39	21	26	32	208
	3年次編入学	2	2	3	1	1	2	11
平成25年度 卒業生進路状況	進学	21	30	20	12	9	12	104
	教員（含む非常勤）	10	1		1	1		13
	公務員		3	1	2	1		7
	民間企業							
	食品・飼料	1					1	2
	繊維・化学・石油			1	2			3
	電力・ガス						2	2
	製薬・医療		1		1			2
	建設・建設材料					4	2	6
	金属・機械		2			1		3
	電気・精密機械						1	1
	情報・通信	5	2	1	1	3		12
	印刷・出版					1		1
	商業・サービス			1		4	2	7
	金融・保険	2	1					3
	教育学習支援						1	1
	運輸・その他			2			1	3
	その他	1	4	3	3	1	5	17
	合 計	40	44	29	22	25	27	187

注）平成26年4月末の状況です。

*留学生を含む

お問い合わせ
窓口のご案内

〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学理学部学務係

TEL : 025-262-6106
FAX : 025-262-6354
Mail : gakumu@ad.sc.niigata-u.ac.jp

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。